

名瀬方言の格標識について

田畑 千秋

2011年7月3日・中日理論言語研究会

於：大阪・同志社大学大阪サテライト

prologue

私が中学校にあがって、文法を習うようになったとき、まずとまどったのが、自動詞と他動詞の区別である。学校の先生は、その区別の仕方として、「他動詞は『ヲ』をつけて言える言葉、自動詞は『ヲ』がつかない言葉」と、とてもわかりやすく、簡単に教えてくれた。私はその基準があまりにも単純なので、試験に出ると聞いても、安心していった。しかし、いざ試験に自動詞と他動詞を区別する問題が出ると、私はいくつかの動詞を間違えて答えてしまった。中でも印象的なのは、「乗る」という動詞である。友人も皆間違えていた。仲間たちと、「『乗る』というのは、あの『自転車__乗る』の『乗る』だろ、それなら『乗る』は他動詞だよな」などと話したのを覚えている。

高校生になると「オ:トバイ__乗って」登校する人も多くなったし、彼女と「ポート__乗りに行く」友人も増えてきたが、誰一人自分が「オートバイに乗って」いるとか、「ポートに乗った」とは思っておらず、「オートバイを乗って」いたり、「ポートを乗った」と思っていた。私にとって今でもヤマトグチ（鹿児島以北の日本語）を使うときは、注意しないと、間違ってしまう語法である。

鹿児島経由で東京に行くときでも、「鹿児島を行って、それから東京を行く」と言っただけなら違和感がない、というより、共通語ではこう表現するのだと信じていた。私一人ではなく、奄美の人の、いえ琉球方言圏で旧方言体系のもとに育った多くの人は、おそらく私とさほど遠くない経験をしていると思う。

琉球方言圏の人はつい、自らの方言で第一補語（直接補語）に位置する N は、すべて N ヲと翻訳してしまう。それほど琉球方言の N と共通語の N ヲは近いのだが、実はそれが間違いのもとである。ちなみに逆は真で、ヤマトグチの N ヲをシマユムタに翻訳するときは、すべて N にして正解である。つまり、翻訳（直訳）の際に、補語としてのヤマトグチの N ヲはシマユムタの N にすべて翻訳可能だが、逆にシマユムタの N は、すべてがヤマトグチの N ヲに翻訳されるわけではないということである。つまり、シマユムタの N のほうは、ヤマトグチの N ヲよりも使用範囲が広いのである。

もう一つ、今でも家内に良く指摘される事例を紹介しよう。それは、「・・・してある」の用法である。新婚旅行で八重山に行ったとき、海岸に魚が干してあるのを見つけて、私が、「魚を干してある」と言うと、家内が、「魚が干してある」と訂正してくれたし、また、観光地の落書きを見て、「絵を描いてある」と言えば、「絵が描いてある」と直してくれた。まさに新婚旅行で深刻に自らの日本語（日本の標準的な話しことば。この稿では

「ヤマトグチ」「共通語」ともする。)に気づかされ、シマユムタとの表現差を痛感した。最近は気をつけているので、勤務先などでの誤用はあまりないと思っているが、家庭内や帰省の時は、緊張がゆるむのか、すぐに「…を…してある」と言ってしまう。

さて、上記は、奄美の人たちが共通語の中に今でも引きずってきている旧方言(伝統的方言)文法の例だが、このようなことは、類似の言語が接触するときには大小を問わず多く生じてくるものである。

この稿では互いに広い意味での日本語である標準日本語の話しことばと、筆者の母語である奄美大島名瀬方言との「言いまわし」のずれを抽出し、奄美方言文法を考える序章としたい。

1 はじめに？ 問題の所在？

奄美方言の名詞の連用的用法の N 形については、松本泰丈が、nominative = accusative と位置づけ、名格 = 対格としている。それは、同じ nominative = accusative であっても、日本古代語なら、主格 = 対格とするのが妥当であろうことを視野に入れた説である^{*1}。ただ、nominative = accusative を、名格 = 対格としたからといって、N 形の主語としての用法をはじめとして、他の用法が奄美方言にないわけではない。

N 形の主語としての位置を、松本は、かつての喜界島方言から提出した^{*2}。また、かつての喜界島方言のほかには、主語表現としての N 形は、体系としては認められないとしながらも、松本は、奄美大島のことわざのいいまわしの中にその存在を指摘している^{*3}。

この松本の指摘したことわざのいいまわしのなかの主語としての N 形は、ことわざという特殊なジャンルのなかの表現形式としてだけあったのではなく、かつての奄美方言が広くもっていた主語表現としての N 形の残存ではないか。筆者（田畑）は、松本説に導かれながら、主語としての N 形を、かつての奄美のウタ言葉のなかに指摘、「(主語としての) N のかかる動詞のほとんどが、意味的に存在や現象をあらわしているということは、松本のいう『現象、存在をあらわす文に主格的な N の例がある』^{*2} を裏づけるも

*1 松本 1984

「なづけ = 提示的な用法をふくめて、奄美方言の格接辞ゼロのかたちを、nominative = accusative とよぶなら、その訳は、主格 = 対格ではなくて、名格 = 対格だろうが、古代日本語なら、おなじ訳でも主格 = 対格かもしれない」(「方言の助詞 奄美諸方言の名詞の曲用にみる問題点」『研究資料日本文法』第 5 巻 助辞編(一) 助詞、明治書院、1984、3、25

*2 松本 1982

「琉球方言の主格表現の問題点」(『国文学 解釈と鑑賞』47-9、1982、8、1 至文堂)

松本 1990 A

「「能格」現象と日本語 琉球方言の場合」(『国文学 解釈と鑑賞』55-1、1990、1、1 至文堂)

松本

「名詞の『主体 = 客体格』の用法と問題点」()

*3 松本 2000

「(前略)方言はなしことばでは、喜界島方言のような格接辞ゼロの主格表現は、体系としてはみとめられなかった。その点で、資料的にはかぎられたなかから、ことわざのいいまわしに、格接辞ゼロの主格がみられることはおもしろそうである」(「ことわざのことばから 奄美大島の方言」『国文学 解釈と鑑賞』65-1、至文堂、2000、1、1

*2 田畑 2007

「奄美のウタ言葉の中の主格用法としての N 形」(『国文学 解釈と鑑賞』72-1、至文堂、2007、1、1)

のとなっている」とした^{*2}。松本は、喜界島方言における主語としてのN 形を、「琉球方言の主格表現の問題点」以来、指摘しつつづけているが、その視座は主にクリモフの内容類型学理論によっている。松本のいうように、他動詞構文の対格（近い補語・田畑）が無標のN 形をとる奄美方言において、自動詞構文でも、述語動詞がひろい意味での状態動詞のとき、主語は近い補語と同じN 形をとり、述語動詞がひろい意味での行為動詞のとき、主語は有標であったということが考えられる。松本は内容類型学の視座からこの問題を掘り下げ、奄美諸方言における活格構造の体系を記述すべく論を展開している^{*3}。

また、最近（2006年）刊行された『名護市史本編・10 言語』は、

自然現象を表わす名詞が主語になる場合にゼロ格になります。

アイ、アミ__ プッタサ。（あ、雨が降り出した。）

タカワタイシ ミーニシ__ プクン。（鷹の渡りで新北風が吹いている。）

（__挿入は田畑）^{*4}

と明記すると同時に、多くのN 形の文例を提示してくれた。

松本の『現象、存在をあらわす文に主格的なN の例がある』という説は、『名護市史本編・10 言語』の文例によって、かつての奄美諸方言だけでなく、現在の沖縄本島を含む北部琉球方言圏に広くおこなわれていた用法である可能性が高くなった。ただ、琉球諸方言は、廃藩置県以来、戦前、戦後、そして日本復帰、高度成長期等々の経験とともに、日本共通語の勢力に圧倒され、伝統的な言語体系を急速に失いつつある。二〇〇九年ユネスコが日本列島の中で、八言語を消滅の危機に瀕する言語リストにあげたが、そのうち六言語が琉球方言であることから、このことがわかる。岩倉の『喜界島方言集』の出版から松本の再評価まで、四十年ほどしか経っていないにもかかわらず、岩倉の使っていた方言の重要な部分が聞かれなくなっていたのである。そして、松本の岩倉再評価からまた三十年近くが経ってしまった。今は、とにかく広く深い調査をし、正確な記述を急がなくてはならない。

この稿では、上記の問題を掘り下げるためにも、筆者の母語 大島北部名瀬方言 を中心に、主語、述語、そして補語について記述する。

記述にあたっては、なるべく共通語と対照し、二者間の差違をも抽出したいと考えているので、高橋太郎ほか『日本語の文法』を座右に粗描してみよう。

なお、奄美方言のN 形については、松本「マークされない名詞のかたちをめぐって」にくわしい。

*2 松本 2007

「琉球方言の主体 - 客体表現から」(2007. 2. 24、類型学研究会発表レジュメ)

*3 高橋 2005

高橋太郎他著『日本語の文法』(2005、4、28 発行、ひつじ書房)

*4 名護市史 2008

『名護市史本編・10 言語 - やんばるの方言 - 』p125

本稿ではなるべく直訳をこころがけるようにしたので、共通語の立場からはこなれた訳とはいえない。たとえば、「Nnu」を「Nの」と訳したために違和感があると思う、筆者自身も奄美方言での「Nnu」は、主節、従属節にかかわらず違和感はないが、奄美方言の主節の「Nnu」を共通語で「Nの」と訳出したとたんに違和感が生じる。「Nnu」を「Nga」と同じ「Nが」と翻訳しようとも考えたが、「Nga」と「Nnu」の使い分けもあるので、あえて「Nnu」を「Nの」、「Nga」を「Nが」と置き換えた。ちなみに九州の一部に、「Nノ」が主節、従属節にわたって主語なる地域がある。こういったところからも琉球方言と九州方言の対照研究が待たれる。

これまでの琉球方言調査でN 形がはっきりと姿を現さなかったのは、多くの文法調査が、形態論からのアプローチであったからであろうか。形態のない は扱いようもないものだったのかも知れない。それは、インフォーマントへの質問の仕方にも影響しているであろう。たとえばインフォーマントは、「『風が吹く』を方言でなんと言いますか?」と尋ねられると、やはり「『kazenu hukjuN』といいます」と答えるであろう。そこにはなかなか「kaze __ hukjuN」の構文は姿を現わさない。加えてインフォーマントのほうも、しっかりした言葉で答えよとすると、どうしても共通語の影響を受けた「正しい言葉なのではないかと思っている言葉（教科書的な言葉、正書法的言葉）」で答えてしまう。「ヲ」がないだけならまだしも、共通語に直すと「ガ」までもがなくなる表現は、深層意識で、自分自身がまちがった言葉を使っているのではないかと不安になるのである。

以下はこの稿における方言助辞（各語形）の共通語助辞への置き換え凡例である。これはあくまでも共通語に逐語的に訳出するための便宜的訳語であることはいうまでもない。方言と共通語を対照する際に助辞に関しては極力揺れを生じないようにとの苦肉の策でもある。そのため内容的に練られた訳出になっていないところはご了承願いたい。

共通語との格助辞訳出対照凡例

無標 （名格・対格・与格・方向格・主格）

ga・qka・gja が（主格）

naN・niN・N に（与格）

?ci へ（方向格）

naNti・Nti・zi で（所格）

si で（具格）

tu と（共格。 具格として使う場合も訳出は「と」としておく。もちろん意味は「で」である。）

kara・ra から（奪格）

gadi まで（とどき格）

gadiN までに（かぎり格）

2、活格構文 この表現はしばらく保留

アイデア 「nu」は連体格仕様であるということは、「ga」よりも行為性が弱いということである。

2-1 主語

2-1-1 Nga 系主語と Nnu 主語

奄美大島名瀬方言の活格構文の主語が「ga」と「nu」でマーク付けられるのは、共通語の主格が「ガ」「ノ」でマークされるのと似ている。ただ、「ga」と「nu」の使用には使い分けがあり、現代では、奄美大島名瀬方言の Nga 系主語（Nqka などの形もとるので Nga 主語せず Nga 系主語とする）と Nnu 主語の対立は、主語名詞の意味的側面にゆだねられている。

Nga 主語となる名詞は、原則として人名詞・人固有名詞・人称代名詞（参照）・指示代名詞（参照）（もの・ひと・ことがら・場所）である。

また、Nnu 主語となる名詞は、人以外の生き物名詞・物名詞である。共通語 Nノと対応するが違うところもある。それは、共通語「ノ」主語が複文従属節だけの限定的な使用方法であるのに対して、奄美方言 Nnu は従属節だけでなく、単文でも複文主節でも使われることである。（このことはひとり琉球方言だけでなく、一部九州方言にもみられる。琉球方言文法と九州方言文法の対称研究が待たれるところである）。

Nnu は主語となるばかりでなく、連体格としての機能が大きいことも共通語の Nノと同じであるが、連体格については別稿したい。

2-1-1-1 人名詞

基本的には Nga 系主語となるが、共通語同様、従属節では Nnu 主語も可能である。

[人名詞・主節] aNmaga uta utaturi. (母が 歌 歌っている)

× [人名詞・主節] aNmanu uta utaturi. (母の 歌 歌っている)

[人名詞・従属節] aNmaga isaNkutuja juhuNtu kikaNba ikaNdo:. (母が 言ったことはよく 聞かなくては いけないよ)

[人名詞・従属節] aNmanu isaNkutuja juhuNtu kikaNba ikaNdo:. (母の 言ったことはよく 聞かなくては いけないよ)

2-1-1-2 人固有名詞

[人固有名詞・単文] siNgumaga kagosima izjaeto . (新熊が 鹿児島 行ったよ)

× [人固有名詞・単文] siNgumanu kagosima izjaeto . (新熊の 鹿児島 行ったよ)

[人名詞・従属節] siNgumaga izjaN toronaN waNdaka ikicjasa . (新熊が 行った所に わたしも 行きたい)

[人名詞・従属節] siNgumanu izjaN toronaN waNdaka ikicjasa . (新熊の 行った所に わたしも 行きたい)

2-1-1-3 動物名詞

- × [動物名詞・単文] toguranaNti majaga nasuri. (台所で 猫が 鳴いている)
- [動物名詞・単文] toguranaNti majanu nasuri. (台所で 猫が 鳴いている)
- × [動物名詞・従属節] majaga nasuNja da:kai. (猫が 鳴いているのは どこかな)
- [動物名詞・従属節] majanu nasuNja da:kai. (猫の 鳴いているのは どこかな)

- × [動物名詞・単文] ha:usiga kusa kaduN. (赤牛が 草 食っている)
- [動物名詞・単文] ha:usinu kusa kaduN. (赤牛の 草 食っている)
- × [動物名詞・従属節] ha:usinga `un doroja kasanu hu-sa. (赤牛が いる ところは 草の 多い)
- [動物名詞・従属節] ha:usinu ?un doroja kasanu hu-sa. (赤牛の いる ところは 草の 多い)

- × [動物名詞・単文] iNnga asuduN. (犬が 遊んでいる)
- [動物名詞・単文] iNnu asuduN. (犬の 遊んでいる)
- × [動物名詞・従属節] iNnga asuduN doroja ko:eN natuqka. (犬が 遊んでいるところは 公園に なっているよ)
- [動物名詞・従属節] iNnu asuduN doroja ko:eN natuqka. (犬の 遊んでいるところは 公園に なっているよ)

- × [動物名詞・単文] iNg be:turi. (犬が 吠えている)
- [動物名詞・単文] iNnu be:turi. (犬の 吠えている)
- × [動物名詞・従属節] iNnga be:tuN torocija ikunayo. (犬が 吠えている ところへは 行くなよ)
- [動物名詞・従属節] iNnu be:tuN torocija ikunayo. (犬の 吠えている ところへは 行くなよ)

2-1-1-4 植物名詞

- × [植物名詞・単文] sakuraga sasuri. (桜が 咲いている)
- [植物名詞・単文] sakuranu sasuri. (桜の 咲いている)
- × [植物名詞・従属節] sakuraga sasun ko:eNci iko: (桜が 咲いている 公園へ 行こう)
- [植物名詞・従属節] sakuranu sasun ko:eNci iko: (桜の 咲いている 公園へ 行こう)

N 形の主格については、後続する動詞が現象、状態をあらわしているときにあらわれやすい。また、メノマエ性との関係もある。このことについては別稿を用意している。

2-1-1-5 自然現象名詞

- × [自然現象名詞・単文] amega hurjuqto(雨が 降るぞ)
- [自然現象名詞・単文] amenu hurjuqto (雨の 降るぞ)
- × [自然現象名詞・従属節] amega hurjuN hija kasanu irjuqto:.(雨が 降る 日は 傘が 要る)
- [自然現象名詞・従属節] amenu hurjuN hija kasanu irjuqto:.(雨の 降る 日は 傘が 要る)

2-1-1-6 もの名詞

- × [もの名詞・単文] hunega izirjuN. (船が 出る)
- [もの名詞・単文] hunenu izirjuN. (船の 出る)
- × [もの名詞・従属節] huniga izirjuNdukiN minatoci kujo: . (船の 出る時に 港へ 来いよ)
- [もの名詞・従属節] huninu izirjuNdukiN minatoci kujo: . (船の 出る時に 港へ 来いよ)

- × [もの名詞・単文] junga wasuri (湯の 沸いている)
- [もの名詞・単文] junu wasuri (湯の 沸いている)
- × [もの名詞・従属節] juga wasaNdukiNja sigu jusirijo. (湯の 沸いた時には すぐ 教えよ)
- [もの名詞・従属節] junu wasaNdukiNja sigu jusirijo. (湯の 沸いた時には すぐ 教えよ)

共通語ならば主語はNガとなり、Nノとはなりえない単文でも、この方言ではNnuがすわる。共通語のNノ主語が、従属節の中での機能しかまかされていない点、同じ属格由来とはいえ、奄美大島方言Nnu主語のはばは広い。

主語としての「ja」(共通語「は」に対応する)は、N主語との関連からも精査する必要がある。

2-1-2 人称代名詞主語形態

	一人称	二人称	二人称敬称	疑問称	不定称
単数	waga (waNga)	jaga (uraga)	naga (naNga)		
複数	wakjaga	jakjaga	nakjaga		
双数	waqtari				

人称代名詞は一人称、二人称、疑問称、にわかれ、それぞれが単数・複数の形をもっているが、三人称「彼、彼女」に対応する語は特に存在せず、指示代名詞(ひと・遠称)ariがそれを担っている。

人称代名詞にかぎって一人称双数に近い waqtari があらわれるのがおもしろい。主語になるには ga のマークづけが必要であるが、この waqtari は必ずハダカのまま主語となる。

ただ waqtari を双数の名残りとして位置づけるには少々研究が必要となろう。

二人称は敬意の有無によって、jaga (単数)・jakjaga (複数) と naga (敬称単数)・nakjaga (敬称複数) の二種に分かれる。

なお、waNga、naNga は名瀬方言では最近の用法である。これは旧名瀬市街地の子ども達が昭和三十年頃から使いはじめた一人称主語で、伝統的方言の使い手は、「まるで犬みたいな感じ」と揶揄していたのを覚えている。ただし、古歌では一人称主語に「わぬが」「わのが」が使われていることもあり、単純に新しい用法ともいえない。

奄美大島中南部方言の対称 (同および目下) は uraga である。

奄美大島方言での一人称複数 は wakja ひといろで、沖縄北部方言に顕著にみられる一人称複数の内包形 (聞き手を含む私たち。アガーミ系形) と排外形 (聞き手を含まない私たち。ワッター系形) の対立はない。奄美大島方言の wakja は沖縄北部方言の内包形 wa:cja に近いという説があるが、それは語の成り立ちからの近さであり、意味的には排外形により近い性格である。大島と違い、喜界島では一人称複数の内包形と排外形が対立する地域が存在し、この面においては、喜界島方言は大島方言より沖縄方言に近いと考えられる。

内容類型学的見地から、一人称複数の内包形と排外形の存在が活格構造類型の包含事象ならば、奄美大島方言よりも、喜界島方言、沖縄北部方言のほうが活格構造類型の基準形に近いのであろう。

2-1-2-1 人称代名詞・一人称

[人称代名詞・一人称単数・単文] waga mun kaduN . (私が もの 食べている。
私が食事をしているの意味)

× [人称代名詞・一人称単数・単文] wanu mun kaduN . (私の もの 食べている。)

[人称代名詞・一人称単数・従属節] waga kaduN muNja koroqketjuN muNdarjto: . (私が 食べている ものは コロッケという ものですよ。)

[人称代名詞・一人称単数・従属節] wanu kaduN muNja koroqketjuN muNdarjto: . (私の 食べている ものは コロッケという ものですよ。)

[人称代名詞・一人称複数・単文] wakjaga uta ke:ti asuduN . (私が 歌 掛けて遊んでいる)

× [人称代名詞・一人称複数・単文] wakjanu uta ke:ti asuduN . (私の 歌 掛けて遊んでいる)

[人称代名詞・一人称複数・従属節] wakjaga uta ke:ti asibjuNoroja joredorodo: . (私が 歌 掛けて遊ぶところは 集会場だよ)

[人称代名詞・一人称複数・従属節] wakjagnu uta ke:ti asibjuNoroja joredorodo: . (私の 歌 掛けて遊ぶところは 集会場だよ)

2-1-2-2 人称代名詞・二人称・同および目下

[人称代名詞・二人称・主節]? jaga uta utai. (君が 歌 うたえ)

× [人称代名詞・二人称・主節]? janu uta utai. (君の 歌 うたえ)

[人称代名詞・二人称・従属節]? jaga utataN utaja da:nu uta. (君が うたった 歌)

は どの 歌)

[人称代名詞・二人称・従属節] ?janu utataN utaja da:nu uta. (君の うたった 歌は どの 歌)

2-1-2-3 人称代名詞・二人称・目上

[人称代名詞・二人称・敬称・主節] naga (naNga) isi kuNsori. (あなたが 言って 下さい)

× [人称代名詞・二人称・敬称・主節] nanu (naNnu) isi kuNsori. (あなたが 言って 下さい)

[人称代名詞・二人称・敬称・従属節] naga (naNga) ?jo:taN kutuja huNtoci omojori. (あなたが おっしゃった ことは 本当と 思います)

[人称代名詞・二人称・敬称・従属節] nanu (naNnu) ?jo:taN kutuja huNtoci omojori. (あなたが おっしゃった ことは 本当と 思います)

2-1-2-4 人称代名詞・疑問称

[人称代名詞・疑問称・主節] taqka utai? (誰が うたっている)

× [人称代名詞・疑問称・主節] tarunu utai? (誰の うたっている)

[人称代名詞・疑問称・従属節] taqka utatuN utacija siqcjuraN. (誰が うたっている 歌とは 知っていない)

[人称代名詞・疑問称・従属節] tarunu utatuN utacija siqcjuraN. (誰が うたっている 歌とは 知っていない)

2-1-2-5 人称代名詞・不定称

[人称代名詞・不定称・単文] amanaNti tarukaga utaturija:. (向こうで 誰かが うた っているね)

[人称代名詞・不定称・単文] amanaNti tarukanu utaturija:. (向こうで 誰かの うた っているね)

[人称代名詞・不定称・単文] amanaNti taqkaganu utaturija:. (向こうで 誰かがの う たっているね)

2-1-3、指示代名詞主語形態

	近称	中称	遠称	疑問称
ひと	kuNcjunu	uNcjunu	ancjunu	dincjunu
	kuqka	uqka	aqka (ariga)	taqka (taruga)
	kuqtaga	uqtaga	aqtaga	taqtaga (tarunNkyaga)
	kuqtaNkjaga	uqtaNkjaga	aqtaNkjaga	taqtaNkjaga

もの	kuqka (kuriga) (kurinu)	uqka (uriga) (urinu)	aqka (ariga) (arinu)	diqka (diruga) (dirunu)
場所・部分	kumanu	umanu	amanu	da:nu

奄美大島北部方言と中南部方言との差違は、「kuriga」由来の近称が北部では「kuqka」、中南部方言では「kuqga」。「uriga」由来の中称が北部方言では「uqka」、中南部方言では「uqga」。「ariga」由来の遠称が北部方言では「aqka」、中南部方言では「aqga」。「taruga (誰が)」由来の疑問称が北部方言では「taqka」、中南部方言では「taqga」、 「diruga (どれが)」由来の疑問称が北部方言では「diqka」、中南部方言では「diqga」となる。

2-1-3-1 指示代名詞・ひと

[指示代名詞・ひと・近称] kuqka sun kutuja siNjo: dekeraNdo . (こいつが することは 信用 できないよ)

[指示代名詞・ひと・中称] uqka sun kutuja siNjo: dekeraNdo . (そいつが することは 信用 できないよ)

[指示代名詞・ひと・遠称] aqka sun kutuja siNjo: dekeraNdo . (あいつが することは 信用 できないよ)

人に対して kuqka (これが)、uqka (それが) というと、見下げた言い方だが、aqka (あれが) は普通に「彼が」「彼女が」の意味で使用する。

疑問称として diqka はものに対してのみ使用し、人に対しては人称代名詞 taruga、taqka を使用する。

2-1-3-2 指示代名詞・もの

[指示代名詞・もの・近称] un kwasiN ? kuma kuqka sikizja. (その 菓子よりも これが 好きだ)

[指示代名詞・もの・中称] aN kwasiN ? kuma uqka sikizja. (あの 菓子よりも それが 好きだ)

[指示代名詞・もの・遠称] kun kwasiN ? kuma aqka sikizja. (この 菓子よりも あれが 好きだ)

[指示代名詞・もの・疑問称] kun kwasinu na:naNti diqka siki? (この 菓子の なかで どれが 好き)

[指示代名詞・もの・不定称] un kwasinu na:naNti dirukaga do ? kudo: . (その 菓子の なかで どれかが 毒よ)

[指示代名詞・もの・不定称] un kwasinu na:naNti diqkaga do ? kudo: . (その 菓子の なかで どれかが 毒よ)

[指示代名詞・もの・不定称] un kwasinu na:naNti diqkaganu do ? kudo: . (その 菓子の なかで どれかが 毒よ)

2-1-3-3 指示代名詞・ことがら

[指示代名詞・ことがら・近称]

- [指示代名詞・ことがら・中称]
- [指示代名詞・ことがら・遠称]
- [指示代名詞・ことがら・称疑問]

2-1-3-4 指示代名詞・場所（部分）

- [指示代名詞・場所・近称] kumaga o:hamado:. (ここが 大浜だよ)
- × [指示代名詞・場所・近称] kumanu o:hamado:. (ここ の 大浜だよ)
- [指示代名詞・場所・中称] umaga o:hamado:. (そこが 大浜だよ)
- × [指示代名詞・場所・近称] umanu o:hamado:. (そこが 大浜だよ)
- [指示代名詞・場所・遠称] amaga o:hamado:. (あそこが 大浜だよ)
- × [指示代名詞・場所・近称] amanu o:hamado:. (あそこ の 大浜だよ)
- [指示代名詞・場所・称疑問] da:ga o:hama? (どこが 大浜)
- [指示代名詞・場所・称疑問] da:nu o:hama? (どこ の 大浜)

物の部分を示す指示代名詞は発達していない。たとえば、豚の解体作業のときなど、こっちが腸、こっちが胃、こっちが肺などという部分を挿す指示代名詞はこれと違ってない。またその際は、ここが腸、ここが胃、ここが肺などと場所名詞が代用されるのではなく、[指示代名詞・もの] kuqka(これが), uqka(それが), aqka(あれが), diqka(どれが), dirukaga(どれかが) を使って充分である。

形容詞述語文で Nga よりも Nnu のほうが強めである。

- beNto: kamjuNja kumaga ĩqjari. (弁当 食べるのは ここが 良い)
- beNto: kamjuNja kumanu ĩqjari. (弁当 食べるのは ここ の 良い。 別な候補地よりもこのほうがベターだというニュアンス)
- beNto: kamjuNja umaga ĩqjari. (弁当 食べるのは そこが 良い)
- beNto: kamjuNja umanu ĩqjari. (弁当 食べるのは そこ の 良い。 別な候補地よりもそこのほうがベターだというニュアンス)
- beNto: kamjuNja amaga ĩqjari. (弁当 食べるのは あそこが 良い)
- beNto: kamjuNja amanu ĩqjari. (弁当 食べるのは あそこ の 良い。 別な候補地よりもこのほうがベターだというニュアンス)
- beNto: kamjuNja da:ga ĩqjari? (弁当 食べるのは どこが 良いか)
- beNto: kamjuNja da:nu ĩqjari? (弁当 食べるのは どこ の 良いか。 別な候補地よりどこかベターな場所はないかというニュアンス)
- taro:ga beNto: kamjuNja da:g^uanu ĩqjaNci isjutaNba, da: ataka wasirita. (太郎が 弁当 食べるのは どこが の 良いと 言っていたが、それはどこだったかなあ、忘れてしまった。 弁当食べるのに適当な場所のことを話していたが、そこがどこであったか忘れたというニュアンス)
- × taro:ga beNto: kamjuNja da:kaga ĩqjaNci isjutaNba, da: ataka wasirita. (太郎が 弁当 食べるのは どこか が 良いと 言っていたが、それはどこだったかなあ、忘れ

てしまった。 弁当食べるのに適当な場所のことを話していたが、そこがどこであったか
忘れたというニュアンス)

× taro:ga beNto: kamjuNja da:gaga ʔiqjaNci isjutaNba, da: ataka wasirita. (太郎が
弁当 食べるのは どこが 良いと 言っていたが、それはどこだったかなあ、忘れ
てしまった)

× taro:ga beNto: kamjuNja da:nuga ʔiqjaNci isjutaNba, da: ataka wasirita. (太郎が
弁当 食べるのは どこの 良いと 言っていたが、それはどこだったかなあ、忘
れてしまった)

× taro:ga beNto: kamjuNja da:nunu ʔiqjaNci isjutaNba, da: ataka wasirita. (太郎が
弁当 食べるのは どこのの 良いと 言っていたが、それはどこだったかなあ、忘
れてしまった)

taro:ga beNto: kamjuNja da:ganuka ʔiqjaNci isjutaNba, da: ataka wasirita. (太郎が
弁当 食べるのは どこがの 良いと 言っていたが、それはどこだったかなあ、
忘れてしまった。 da:ganu よりも少し強め)

× taro:ga beNto: kamjuNja da:gakanu ʔiqjaNci isjutaNba, da: ataka wasirita. (太郎が
弁当 食べるのは どこがかの 良いと 言っていたが、それはどこだったかなあ、
忘れてしまった)

主語形態ではないが、主語を助辞 du で強調するときは、N + du が普通である。しか
し最近では、より強調するためなのであろうか、Nga + du、Nnu + du と使用されることも
多い。

beNto: kamjuNja kumadu ʔiqjari. (弁当 食べるのは ここぞ 良い)

beNto: kamjuNja kumagadu ʔiqjari. (弁当 食べるのは ここがぞ 良い)

beNto: kamjuNja kumanudu ʔiqjari. (弁当 食べるのは このぞ 良い)

du:nu muN kadi, da:nu warusari. (自分の ものを 食べて、どこが 悪いか)

du:nu muN kadi, nu:nu waqsari. (自分の ものを 食べて なにが 悪いか。和野)

笠利和野 da:ga da:nu 両方可

diruga 目上

diqka 目下

dirunu あまり使わない

nu:nu、nu:ga 両方可

奄美諸方言の指示代名詞では近称、中称、遠称がそれぞれ対立しているが、沖縄方言の
指示代名詞には、近称・中称と遠称（近称と中称・遠称）の二項対立型が広く分布してい
る。このことに関して平山輝男『琉球先島方言の総合的研究』（1967・明治書院）は、「琉
球方言の特色として、コノ系列とソノ系列、ソノ系列とアノ系列の概念が、それぞれ明確
に区別されていないことがあげられる。？ 中略？ ...という実情は、言語生活の上の表

現性にいろいろ関係していることが指摘される」と述べている。

この沖縄方言の近称・中称と遠称（近称と中称・遠称）の対立を一人称複数包含形（アガーミ）と一人称複数排外形（ワッター）の対立とに関連づけてとらえたのは内間直仁である。内間は、指示代名詞の二項対立地域が、人称代名詞一人称複数包含形・排外形の二項対立地域と重なることを確認、それは社会構造の反映であると述べている。

現代の奄美諸方言の多くは近称・中称・遠称のある三項対立型だが、地域によって、あるいは人によっては、近称と中称の不分明性がみられる。

[指示代名詞・ひと・近称] kuqka sun kutuja macige be:rido: (こいつが すること は 間違い ばかりだよ)

kumaga o:hamado:. (ここが 大浜だよ)

du:nu muN kadi, da:nu warusari. (自分の ものを 食べて、どこが 悪いか)

du:nu muN kadi, nu:nu waqsari. (自分の ものを 食べて なにが 悪いか。和野)

beNto: kamjuNja da:ga 'iqjari. (弁当 食べるのは どこが 良いかな)

un kwasiNkuma kuqka sikizja. (その 菓子よりも これが 好きだ)

? jaja kun kwasinu na:naNti diqka siki? (君は この 菓子の中で どれが 好き?)

笠利和野 da:ga da:nu 両方可

diruga 目上

diqka 目下

dirunu あまり使わない

nu:nu、nu:ga 両方可

旧名瀬町では、kuriga、uriga、ariga、diruga は日常会話ではあまり耳にしませんが、これが kuqka、uqka、aqka、diqka などのもとの形であるということは誰でもが知っていて、ゆっくり（ていねいに）話してもらおうとすぐに、この形が出現する。また、旧名瀬市以外では指示代名詞（物）に Nnu 系統（kurinu、urinu、arinu、dirunu）を使う地域も多く、Nnu が Nga 系よりもていねいな使い方だという人もいる。

diqka ja: muN ? (どれが あなた もの?)

kuqka wa: (waN) muN . (これが 私 もの)

指示代名詞近称 kuqka、中称 uqka、遠称 aqka は「ひと」「もの」共有なので、人をさす場合は見下げた表現となり、目上には使えない。目下の子どもなどを叱ったりする際、

「kuqka waqsaNdarō . (こいつが 悪いのだから) 」

などと言うときにかぎられる。目下でも非難的でない場合は kuN?kwa(この子)というのが普通である。kuqka といわれたら、子供でも「もの扱い」にされたように感じ良い気はしない。ましてや大人になってから指示代名詞で指し示されたら、誇りがおおいに傷つき、指し示した人と指し示られた人との間は冷戦状態になるおそれ大である。その場合は「kuN?kwa(この子)」同様、「kuNcju (この人)」と丁寧に言う。「kuNcju (この人)」の「cju」が一般名詞なので、主語であっても nu 格となるのである。

指示代名詞疑問称は「ひと」は「taru」、「もの」は「diru」と別々なので混同はされる

おそれはない。主語となるときは taruga、diruga がつづまって taqka (誰が)、diqka (どれが)となる。

taqka kyuNci ? (誰が 来るって?)

aqka kyuNcido: .(彼が 来るってよ)

指示代名詞(場所)は、Nnu となる。

da:nu asjuNci ? (どこが 空いてるって?)

amanu asjuncido: .(むこうが 空いているってよ)

2-2 述語と補語

2-2-1 補語を必要としない述語

taro-zju:ga (nu) morisuN . (太郎-父が (の) 亡くなる) morisuN はもともと mori + suN なので、本来の述語 suN(する)が、第一補語 mori (死)、主語 taro-zju:ga(太郎-父が)を要求している。morisuN を複合語と認定すれば補語のない活格構文であろう。suN(する)は多くの複合語を作るのでこういうことは多い。

turinu nasjuri . (鳥の 鳴いている)

iNnu berjuN . (犬の ほえる)

iNnu asuduN. (犬の 遊んでいる)

cu:nu aqcjuri . (人の 歩いている)

サハダチシ アッキュンニャ。

サハダチシ アッカリュンニャ。

basunu hasituN . (バスの 走っている)

ツムギシ イキヨ。

ハーヌグルィ ムイジヌ チ (赤くなった 水 来た。 洪水になった。)

ヤマナンティ ハナヌ サシュリ。 (山で 花の 咲いている)

2-2-2、近い補語を必要とする述語

2-2-2-1 標準語の対格に相当するN 補語と述語

琉球方言全般にいえることだが、ここでも例にもれず第一補語は基本的にN 形である。基本的にといったのは、Nを強調するときにはNバが用いられるし、Nドウで強められることもある。ただNバは標準語の直接補語専用ではなく、標準語の間接補語を強めることもある。いずれにしても強調しない平常表現ではすべてN 形である。

2-2-2-1-1 行為の直接的な対象を要求する述語

2-2-2-1-1-1 行為を受ける対象を要求する述語

フッシュガ サンシングワ__ ヒチモン(祖父が 三線__ 弾いておられる)

この時の爺さんは限定されていないので語り手の祖父である。祖父は非分離所有なので、語り手の祖父でない場合は、必ず「タロー-フッシュ(太郎-祖父)」、「イヤ-フッシュ(君-祖父)」というように所属先を明示する。「グワ」は指小辞。

ワガ フートナン キッテ__ ハリユン。(私が 封筒に 切手__ 貼る)

ワガ フネイ__ クウジャン。(私が 舟__ 漕いだ)

タロー-ハギ__ クダン。(太郎-足__ 踏んだ。主語は私)

ハギ__ ウッチャン。(足__ 打った。)

主語は私。足も私の所有物。自分で自分の足を打つことはないの。これは足をぶつけたということの表現である。)この場合、「打つ」は非行為であると同時に、被行為である。)

タローガ ワン-ハギ__ ウッチャン。(太郎が 私-足__ 打った。) 主語は太郎。

2-2-2-1-1-2 作り出す対象を要求する述語

アンマガ ヤセエ__ ニシモン。(母が 台所で 野菜__ 煮ておられる)。

アンマガ トゴラナンティ カサ__ タシモン。

(母が 台所で 粥__ 炊いておられる)。

アンマガ トゴラナンティ ムチヌ スィームン__ シモリユン。

(母が 台所で 餅の吸い物__ しておられる。餅の吸い物を今作っておられるということ)。

アンマガ トゴラナンティ シル__ ワーシモン。(母が 台所で 汁__ 沸かしておられる)。

タローガ ヤ__ ツイクタン。(太郎が 家__ 作った)

タローガ エ__ カサン。(太郎が 絵__ 描いた)

2-2-2-1-1-3 やりとりをする対象を要求する述語

カゴシマラ チャン チュヌ メエーラ ニャーゲエ__ モラタ。

(カゴシマから 来た 人の 前から 土産__ もらった。主語「私」が隠れている。)

イヤーネイン ワ-サンシン__ ユズロ。

(お前に 私-サンシン__ 譲ろう。主語「私」が隠れている。)

クウン サンシン__ タルネイン ユズララン。

(この サンシン__ 誰にも 譲られない。サンシン が第二補語よりも前に出て来たので、提題の N のようにもとれる)

クウン サンシンヤ タル__ ユズラランドー .

(このサンシンは 誰__ 譲られないよ。)

第一補語が前に出てきて-ja でとりたてられ有標となったので、そのすきに第二補語が無標の座に坐ったのである)。

カイジョーナンティ センセイ-サンシン__ ユズラッタ .

(会場で 先生-三線__ 譲られた)。

この文の示す状況を丁寧に言うと、

ワガ カイジョーナンティ センセイ^サ-メーラ センセイ^サ-サンシン ユズラッタ .

(私が 会場で 先生 前から 先生-三線__ 譲られた)

ということである。センセイ^サラ(先生から)と直接先生に取り外しの接辞-ra を付けることができないからである。-ra が直接付けられるほどには、先生の空間性が足りないため、先生にメー 前 をつけて空間性を作ったのである)

フーキンガヌ マヤクワ モラティ ユルクウドウン .

(大人の男の 子猫 もらって 喜んでいる。フーキンガは大男ではなく大人の男、マヤクワのクワは指小辞)

2-2-2-1-1-4 知覚・認識活動の対象を要求する述語

コーロヌ ナキグ^サ__ キチャットー .(コツカルの 鳴き声 聞いたよ)

この表現は文法的には可能だが日常生活では、

コーロヌ ナシュタットー .(コーロが 鳴いていたよ)。

が普通である。

奄美大島方言では、聞く動作の主体を立てて、「私が~を聞いた」というのは普通の表現ではなく、行為者を前面に出して「~が鳴いていた」と現象的に表現する傾向がある。

「~が鳴いていた」の中には、語り手が「鳴いているのを聞いた」という事実を含んでいるから、事実を述べるだけで十分に意は通じる。

フンマヤ ワガ イジャットウ、ワン__ ミチ ユルクウディモタン .

(祖母は私が 行ったら、私__ 見て 喜んでいらした)。

「私」を強調して、

フンマヤ ワガ イジャットウ、ワン^バ ミチ ユルクウディモタン .

(祖母は私が行ったら、私^ば見て喜んでいた)。とも言える。この時、「ワン(私)」が人代名詞なので強調の「バ」がでやすいが、普通は「ワン」で充分である。

2-2--2-1-1-5 言語・思考活動の対象を要求する述語(補語は抽象名詞)

ハジムイラ ダンドウリ__ キッチャ カンゲエティ スイルイヨー .

(はじめから 段取り__ よく 考えて しなさいよ)。

ナキヤ-センセイ^サヌ クウトウ__ キシ キョータ .

(あなた -先生の こと__ 聞いて 来ました)。

トウキョウナンティ シマヌクウトウ__ イロイロ キカッタ .

(東京で シマのこと__ いろいろ 聞かれた。尋ねられたということ)。

アンマネイン ガクモンヌ クトゥ__ タズネラッタ。

(母に 学問の こと__ 尋ねられた)。

フッシュガ マガンキャヌ クトゥ__ シワシリョータ。

(祖父が 孫達の こと__ 世話していらした。心配していたということ。)

イナサリンラ フッシュ ハナシ__ キチ ホデェタ。

(小さいときから 祖父 話 聞いて 育った。「祖父のする話」で、祖父の教えに近い)。

イナサリンラ アンマネイン フッシュ ハナシ キカサッティ ホデェタ。

(小さいときから祖母に祖父 話 聞かされて育った。これは「祖父の話」つまり「祖父の逸話等」のこと)。

イナサリンラ フッシュ クウトウ__ キチ ホデェタ。

(小さいときから 祖父 こと__ 聞いて育った)。

2-2-2-1-2 動作のかかわる場所をあらわす補語を要求する述語。(場所名詞)

2-2-2-1-2-2 移動の出発点

ナゼエ__ ウッタチ アチャヤ カゴシマ ツィキユン。

(名瀬__ 打っ発って 明日は 鹿児島 着く)。よりも

ナゼエラ ウッタチ アチャヤ カゴシマ ツィキユン。

(名瀬から 打っ発って 明日は 鹿児島 着く。「打っ発って」は「出発して」の意味)。が普通。

ヤー__ ウッタチ ミキャ ナリユン。

(家__ 打っ発って 三日 なる)。

ヤーラ ウッタチ ナゼエ__ イジャン。

(家から 打っ発って 名瀬 行った)。は普通。

ヤー__ イジティ イケイ!(家__ 出でて 行け)

ヤーラ イジティ イケイ!

(家から 出でて 行け。ヤーは語尾をのばして上げること)

ヤー__ イジティ イジャ。

(家__ 出でて 行った)。

ヤーラ イジティ イジャ。

(家から 出でて 行った)。

ヤー__ イジバティ クワヰシャ イキャンガネイシ コーエン イジャン。

(家から 出でて 会社 行かないで 公園へ 行った)。

ヤーラ イジバティ クワヰシャチャ イキャンガネイシ コーエンチ イジ アタン。(家から 出でて 会社へは 行かないで 公園へ 行って いた)。

イジティ イケイ。(出でて行け)!

移動の出発点をあらわす補語 N は、ここで、でどころ格 N ラと競合している。

2-2-2-1-2-2 通り過ぎる場所

フネイヤ ナ シチトーナダ__ スジャ。(船は もう 七島灘__ 過ぎた。)

アサンチャ ヤマ__ クウティドゥ イキユン。

(朝仁へは 山__ 越えてぞ 行く)。

2-2-2-1-2-3 通りゆく場所

カリシャヤ ヤマ__ アッキユ。(狩人は 山__ 歩く)。

これは文法的には普通だが、社会的(職業的)にあたりまえすぎて、まず言わない。この文だと狩人の語彙説明である。

カリシャヤ ヤマ__ イッペ アッキマーティ チャン。

(狩人は 山__ いっぱい 歩き回って きた。「山 いっぱい」とは「山中」のことである)。

カリシャヤ ヤマ__ イッペ アッキマーリユン。

(狩人は 山__ いっぱい 歩き回る。これは獲物を探し回る様子の形容)

ヤマ__ イッペ アッキマータンバ オモタンムン ネエンタ。

(山 いっぱい 歩き回ったが 思ったもの なかった。獲物はなかったということ)。

ヤマ__ イッペ アッキマータンバ キーザイリョー ネエンタ。(山__ いっぱい 歩き回ったが 良い材料 なかった。大工の材木探しの折の慣用的な言葉)。

フネィヌ ナマ タチガン__-ウキ__(ドゥ) ハシトゥン。(船の 今 立神 - 沖__ (ぞ) 走っている。強めはバでなくドゥ)。

レッシュヤ トンネルヌ ナー__ ハシトゥン。(列車は トンネルの 中__ 走っている)

2-2-2-1-3 形式的な意味をあらわす動詞と組み合わせさせて、実質的な内容をにう。

ベエンキョー__ シュン。(勉強__ する)。

ベエンキョー__ スロー。(勉強__ しよう)。

ベエンキョー__ ハジムイリユン。(勉強__ はじめる)。

参考 ベエンキョー__ シ テェケエティ。(勉強__ し 始めよう)。

シグウトウ__ テェケエリユン。(仕事__ はじめる。自己意志)

参考 シグウトウ__ シ テェケエタースイ。(仕事を し はじめた。仕事はじまったの意。第三者が見て)

参考 アッキ テェケエロ。(歩き はじめよう)。

参考 ナ テェケエロー。(もう はじめよう)。

トートー ウタ__ ウチジルイ。(さあさあ 歌__ 打ち出でよ)

「歌を 打ち出せ」の意である。歌よ出てこいと、歌が自発的にうち出てくるのをうなが

しているように感じられる。歌遊びの場でよく使う慣用句だが、不活格構文ではなく、「誰かが歌を打ち出せ」という意味の活格構文であろう。他動詞、自動詞という基準がないからこのような表現が可能になるのではなからうか。

トートー ウタ__ ウチジャスイ。(さあさあ 歌 打ち出せ。)

最近の歌遊びの場ではこの表現が多くなった。古老はこれでは命令が強いように感じるようである。

トートー ウタ__ ハジムイロ。(さあさあ 歌__ はじめよう)。

ベェンキョー__ ツイズイケリユン。(勉強__ 続ける)。

ガッコー__ オワテイ。

(学校__ 終わった。下校している。放課後になっている。卒業している。) 活格構文
シュクダヅ__ オワタン。(宿題__ 終わった)。主語が表面化していないだけである
活格構文)。

×シュクダヅ__ オエタン。(宿題__ 終えた)。という言い方はない。

ベェンキョー__ スタットー。(勉強__ 済んだよ。一人称主語の省略 活格構文)

ベェンキョー__ スマシユン。(勉強__ 済ませる。一人称主語の省略 活格構文)。

参考 「失敗をくり返す」の「くり返す」にあたる言葉は無い。代わりに「…ベェーリ
シユン。(…ばかり している)」という。

参考 マチゲェ-ベェーリ__ シユン。(間違いばかり__ した)。となる。

「被害を受ける」という表現はしなかった。

参考 テェーフーシ ウチチリヤサツティ。(台風で うち散らされて)。

参考 ×テェーフーン ウチチリヤサツティ。(台風に うち散らされて)。

参考 ×テェーフヌ ウチキョーチ。(台風の 打ち壊した 台風が打ち壊すのはおか
しい)。

参考 アームンヌ ウチキョーシ クラティ。(あいつの 打ち壊し やがって)。

参考 アームンヌ ウチキョーチ。(あいつの 打ち壊した)。

参考 ケェンゴヌ ムンヌン ウチキョサツティ。(健吾の やつに 打ち壊され
て)。

参考 ケェンゴヌ ムンガ ウチキョーシ クラティ。(健吾の やつが 打ち壊し
やがって)。

参考 アームンヌン ウチキョーサツティ。(あいつに 打ち壊されて)。

シケン__ ウケリユン。(試験__ 受ける)

「損害を与える」という表現は無い。

スン__ スイムイリユン。(損__ させる)。

使役、スイムイリユン(させる)に続くときは、N になる。

「犠牲を強いる」という表現は無い。「犠牲を強いる」ということは、「ムリヤリ
ウシツィケイティ(むりやり押しつけて)」となる(川畑さん談)。

参考 シヤ シュリヤー、ムリヤリ ウシツィケイティ ケェガ__ スイムイティ
キヌドクナ クウトウ サン。

(しはするねー なかなかやるねーの意、むりやり 押しつけて 怪我__ させて、気

の毒な こと した)。

タンマンバ キーチャンバ メイワク__ ケエータ .

(頼まなければ良いのに、迷惑__ かけた)。

シカンチャゲサン ツィラ__ スン .

(好かないような 顔__ する。「シカンチャゲサン ツィラ」は「嫌そうな顔」)。

スイカン ツィラ__ スイラッティ キムグルサヌ オージラン .

(好かぬ 顔__ されて 心苦しさを たまらない。「スイカン ツィラ」は「嫌な顔」)

タハサヌ クウキラン .(高さの 越えきれない。高いので越えることができないの意)

「長い顔を している」を直訳して、

×ナガガヲ__ スン .(長顔 している)。と言ってしまうては笑い出してしまう。なぜなら「スン」は行為的だからであろう。鏡を見ながら長顔に作る練習をしているのなら良いが。

ナガガヲツチュ .(長顔人)。

アン チュヤ ナガガヲドー .(あの 人は 長顔だ)。

アン チュ__ ナガガヲドヤー .(あの 人__ 長顔だよ)

アン チュヌ カヲヤ ナガガヲドー .(あの 人の 顔は 長顔だ)

カヲ__ ナガサリヤー .(顔__ 長いねー。)

カヲヌ ナガサリヤー .(顔の 長いねー。顔を強調しているように思える))

2-2-1-4 後置詞と組み合わせる補語

×「本日を もって終了します」という表現は無い。

ナ キューシ オワリドー .(もう 今日で 終りだよ)。

×「先生を 通して 松本先生と 知り合った」は、

センセキ__ トゥーチ マツモトセンセキトゥ シリアヲウタン。といえそうな感じもするが少し不自然な感じがする。「トゥーチ(通して)」というどうしても空間のあるものを通すような気がしての違和感。

センセキメエラ マツモトセンセキ(ヌ) クウトウ キサン。

(先生前から 松本先生(の) こと 聞いた)

×「彼をおいてほかに無い」という表現は無い。そう言いたいのなら、

アッカ フカ__ クウリ スン チュヤ ヲウラン。

(彼の ほか これ する 人は いない)

(「アッカ フカ__」は中南部では「アルイン ホカ 」となる。

奄美大島方言ではつい最近まで後置詞は存在しなかったといったほう適切であろう。古老、特に女性は使用しない。それでも現代はヤマトグチの表現の影響か、耳にすることもある。特に社会的(政治的・経済的)話題に登場する。しかし、シマヤマトグチのような感じがするのはいなめない。マスコミを通してヤマトグチが容赦なく入ってくる世であるから、その新語流通口調はずいぶん市民権を得てきた。

2-2-2-2 標準語の与格に相当する N 補語と述語

標準語で間接補語は N 二の形態をとるが、奄美大島では N ネイン(人)、N ナン(物)と使い分けられる)。ただ、第一補語の無い構文では、この第二補語が無標となる。また、第一補語が存在しても、それが「ヤ」「バ」「ドゥ」などでとりたてられ、前面出ると(前面に出なくても可。述語から離れると)、第二補語が無標となる。

2-2-2-2-1 間接的な対象をあらわす

2-2-2-2-1-1 くつつく所

間接対象のくつつく所には、いつもくつつく物があるので、直接対象が第一補語となって活格構文を作る。第二補語は有標。

イレバナン ムチ クッケティ .

(入れ歯に 餅 くつつけて。一人称主語の省略)。

イレバナン ムチ クッカティ .(入れ歯に 餅 くつつけて)。

名瀬でくつつくことを「ムチカル」というが、これは「餅くつかる」の意味か。

ハギナン ガム クッケトウツカ .

(足に ガム くつつけているよ。一人称主語の省略)。

ガム クッカトウツカ .(ガム くつついているよ)

ただし、下記のようにも言う。

イレバナン ムチヌ クッカティ .(入れ歯に 餅の くつついて)。 餅の強調。

ハギナン ガムヌ クッカトウツカ .

(足に ガムの くつついているよ)。 ガムの強調。

2-2-2-2-1-2 あいて(ヒト名詞)

カミサマ ネゲエ タティタツトウ、キャシキャシ スイルイチ イヤツタ .

(神様 願い 立てたら、どうどう せよと 言われた。一人称主語の省略)

ただし、第二補語の形態「-ナン」付けても言う。

カミサマナン ネゲエ タティタツトウ キャシ キャシ スイルイチ イヤツタ .

(神様に 願い 立てたら、どうどう せよと 言われた。)一人称主語の省略 神様の強調

センセヅトウ オタンヤ サンネエンメエダリヨツト .

(先生 会ったのは 三年前ですよ。一人称主語の省略)

センセヅトウ オタンヤ サンネエンメエダリヨツト .(先生と 会ったのは 三年前ですよ。一人称主語の省略)。

×センセヅナン オタンヤ サンネエンメエダリヨツト .

上記の場合「ナン」は使わない。「オユン(会う)」は N と Nトウが競合する。

×クウシナン カツケリユ .(腰に 掛ける。腰に負うこと)

×クウシ カツケリユ .(腰 掛ける。腰に負うこと)

クウシカチ カツケリユ .(腰へ 掛ける。腰へ負うこと)

クウシラ カッケリユ。(腰から 掛ける。腰に負うこと)

参考 「腰に背負う」は直訳できない。「腰へ背負う」「腰から背負う」となる。

カッケリユン(掛ける)は、掛ける物があるはずなので、それが第一補語であり、腰は第二補語である。この構文では第一補語が省略されている。

「手につかむ」は直訳できない。「手でつかむ」となる。

×ティーナン ツカディ。(手に つかむ)

×ティートウ ツカディ。(手と つかむ。北大島でトウ(と)は具格でも使われる)

×ティー__ ツカディ。(手__ つかむ)

ティーシ ツカディ。(手で つかむ)

「手へ持つ」は直訳できない。「手に持つ」となる。

ティーナン ムチュン。(手に 持つ)

×ティーチ ムチュン。(手へ 持つ)

×ティー__ ムチュン。(手__ 持つ)

2-2-2-2-1-3 あいて 態度の対象

基本的には不活格構文だが、N はNナンと競合している。

アスイビ__ フルィティ ランプン ソージ スィランダナ アニョー イヤッテ
イ.

(遊び__ 惚れて・夢中になって ランプの 掃除 しなかったので 兄 しかられた)。

アスイビナン フルィティ ランプン ソージ スィランダナ アニョー イヤ
ッテ.

(遊びに 惚れて・夢中になって ランプの 掃除 しなかったので 兄 しかられた)。
活格構文 遊びを強調。

ラウナグ フルィティ.

(女 惚れた 私が、女にほれた。一人称主語省略)。

ラウナグヌ フルィティ.(女の ほれた。女が狂った。第二補語省略)

「アスイビブルィティ(遊び夢中になる)」「ユタぶれ(神がかり)」という複合語を作る。

オヤ タティツィティ.

(親 たてついて。一人称主語省略)。 私が親にたてついた。活格構文

オヤン タティツィティ.(親に たてついて。一人称主語省略)。 親を強調。

オヤヌ タティツィティ.

(親が たてついた。第二補語の省略。 親よりももっと大きな権力に親がたてついたのである。)

アガラムンヌ オヤン タティツィチクラティ.(あんなやつが 親に たてつきやが
って。第二補語の強調)。

2-2-2-2-1-4 なしとげ(成就)の対象

シケイン__ スビティ ナチュッカ。(試験__ すべて 泣いているよ。主語の省略)。

シケインナン スビティ ナチュッカ。(試験に すべて 泣いているよ。主語の省略)。試験の強調。

シケイン__ ウティティ ナシュッカ。(試験__ 落ちて 泣いているよ。主語の省略)

シケインナン ウティティ ナシュッカ。(試験に 落ちて 泣いているよ。主語の省略)。試験の強調。

クウン ツムギヤ ケンサ__ ウティタン ツムギ。(この 紬は 検査 落ちた 紬)

×「結婚にこぎつけた」のような表現はできない。

「島めぐりに成功した」のような表現は難しいが、あえて表現すると、

シマムィグリ ムン-ナサン。(島めぐり もの-した)

「N もの-した(ものにした、の意)」のN は第一補語。

「~ ものになった」は不活格構文。

ドリヨク ムンナティ。(努力 ものなって)

ドリヨクヌ ムンナティ。(努力の ものなって) 努力の強調。

「~ ~する」は活格構文。主語が略されているだけである。

シマムィグリ セイコウサン。

(島めぐり 成功した)。

2-2-2-2-1-5 状態や性質がなりたつための基準

ミナトナン ヤー__ チカサ。(港に 家__ 近い)。港の強調。

ヤーヌ ミナト__ チカサ。(家が 港__ 近い)。家の強調。

ミナトナン リョカン__ チカサッカー。(港に 旅館__ 近いよ)。

ナゼヤ シマ__ チカサ、カゴシマ ヒンギロヤ。(名瀬は シマ・故郷__ 近い、鹿児島 逃げようよ。駆け落ちの相談。島歌の歌詞。

ナゼヤ シマ チカサンカナ カゴシマチ ヒンギロヤ。(名瀬は シマ__ 近いので 鹿児島へ 逃げようか)。

「似る」はNネイン(Nに)補語でなく、Nトゥ(Nと)補語。

×ウトウトウヌ ジューネイン ニスン。(弟の 父に 似ている)。

ウトウトウヌ ジュー__ ニスン。(弟の 父__ 似ている)。

ジュートゥ ウトウトウ__ ニスン。(父と 弟__ 似ている)。

ウトウトウ ジュートゥ ニシュン。(弟と 父と 似ている)。

ムチハコビ__ ベンリドー。(持ち運び 便利だよ)。

ムチハコビナン ベンリドー。(持ち運びに 便利だよ)。

ムチハコビヌ トウキン ドゥヤッサドー。(持ち運びの 時に 楽だよ)。

(持ち運びの時 楽だよ。「ドゥヤッサ」は楽に出来ること。便利なこと。ここでは都合良く持てること。の意味)。

2-2-2-2-1-6 いれるところ。はいるところ。のせるところ。のるところ。

入れる行為は第一補語を入れるので、第二補語は基本的に有標。

フクロナン タカラムン イルイリユン。(袋に 宝物 入れる)

フクロチ タカラムン イルイリユン。

(袋へ 宝物 入れる。「チ」となると誰かにうたっているような感じがする。)

フクロ イルイリユン。

(袋に入れる。入れるものがはっきりと目の前にある時などに限って可能。そうでなければ「袋を何かに入れる」行為になる。)

ウリヤ フクロ__ イルインナヨ(それは 袋__ 入れるなよ)。

ウリバ フクロ__ イルイリユン(それを 袋__ 入れる)。

乗る行為の補語は基本的にはN だが、Nナン、Nチが競合している。

フネイ__ ヌリユン(船__ 乗る)。

フネイナン ヌリユン(船に 乗る)。

フネイチ ヌリユン(船へ 乗る)。

スイブネイ__ ヌリユン(割り舟__ 乗る)。

スイブネイナン ヌリユン(割り舟に 乗る)。

スイブネイチ ヌリユン(割り舟へ 乗る)。

クルマ__ ヌリユン(車__ 乗る)。

クルマナン ヌリユン(車に 乗る)。

クルマチ ヌリユン(車へ 乗る)。

キシャ__ ヌリユン(汽車__ 乗る)。

キシャナン ヌリユン(汽車に 乗る)。

キシャチ ヌリユン(汽車へ 乗る)。

乗る物が自転車、オートバイの場合は、Nチは無理である。空間性の乏しさであろうか。

オートバキ__ ヌリユン(オートバイ__ 乗る)。

オートバキナン ヌリユン(オートバイに 乗る)。

× オートバキチ ヌリユン(オートバイへ 乗る)。

ジテンシャ__ ヌリユン(自転車__ 乗る)。

ジテンシャナン ヌリユン(自転車に 乗る)。

× ジテンシャチ ヌリユン(自転車へ 乗る)。

2-2-2-2-1-6 (受け身文や使役文で)動作の主体

受け身文では、被行為者が主語となり、行為者がN になる。

アンマ__ イヤッタ(母__ 叱られた)。

アンマン イヤッタ(母に 叱られた)。

ジュ__ ウタッタ(父__ なぐられた)。

ジュネイン ウタッタ(父に なぐられた)。

使役文では第一補語がN になる。

アンマヌ ワンネイン ホロタキ__ シムイティ。

(母の 私に 風呂焚き させて)

やりもらい

ウトウトン エンピツ__ クリイロ。(弟に 鉛筆 くれよう)

エンピツヤ ウトウトウ__ クリイロ。(鉛筆は 弟 くれよう。第一補語が「ヤ」
でとりたてられ、前に出たので、第二補語が無標になった)

エンピツヤ ウトウトン__ クリイロ。(鉛筆は 弟に くれよう。鉛筆も弟も強調し
ている。)

アンマン ズイン(カネイ) オーセリャヲロ。(母に 金 さしあげよう)

クン ズイン(カネイ)ヤ アンマ オーセリャヲロ。

(母に 金 さしあげよう。第一補語が「ヤ」でとりたてられ、前に出たので第二補語
がN になった)

2-2-2-2-2 動作の状態のかかわる場所をあらわす。(場所名詞)

2-2-2-2-2-1 ありが

ワガ ヤ__ ヨウツカ(私が 家__ いたよ)。

ワガ ヤナン ヨウツカ(私が 家に いたよ)。

ワガ ヤチ ヨウツカ(私が 家へ いたよ)。

シシヌ アン ヤマ__ ヨウタンチドー(猪の あの 山__ いたってよ)。

シシヌ アン ヤマナン ヨウタンチドー(猪の あの 山に いたってよ)。

シシヌ アン ヤマチ ヨウタンチドー(猪の あの 山へ いたってよ)。

2-2-2-2-2-2 移動の到達点(N とNチが競合する)

ナゼラ アサン イキュン。(名瀬から 朝仁 行く)

ナゼラ アサンチ イキュン。(名瀬から 朝仁へ 行く)

×ナゼラ アサンナン イキュン。(名瀬から 朝仁に 行く)
 アサンナン タカラムン ウチ アン。(朝仁に 宝物 おいて ある)
 トーキョーカチ ミシュ ウクリュン。(東京へ 味噌 送る)
 トーキョーチ ミシュ ウクリュン。(東京へ 味噌 送る)
 ミシュ トーキョー ウクリュン。(味噌 東京 送る)
 ナンヤ キョラシタクシ ダー イモロチ?(あなたは 綺麗な支度をして どこ
 行こうって)
 ナンヤ キョラシタクシ ダーチ イモロチ?(あなたは 綺麗な支度をして どこへ
 行こうって)
 ナンヤ キョラシタクシ ダーチガ イモリユル?(あなたは 綺麗な支度をして ど
 こへが 行こうって)
 答えは、
 トーキョー。
 トーキョーチ。
 トーキョーカチ。
 トーキョージ ミチコーチ。(子供達が東京にいる場合)

2-2-2-2-3 あらわれる場所。消える場所。

ガマン シャーナン ケインムンヌ イジリユン(崖の 下に ケインムンの 出で
 る)。とはあまり使わない。普通は、
 ガマン シャーヤ ケインムンヌ イジリユン(崖の 下は ケインムンの 出でる)。
 アン ケイヌ シャーヤ ヨーレエヌ タッチュンドロドー(あの 木の 下は 幽霊
 の 立っている所ぞ)。
 アン ケイヌ シャーナンニヤ ヨーレエヌ タッチュッドー(あの 木の 下には
 幽霊の 立っているぞ)。
 アン ケイヌ シャーチ ヨーレエヌ イジャ(あの 木の 下へ 幽霊の 行った)。
 アン ケイヌ シャーチ ヨーレエヌ キーティ イジャ(あの 木の 下へ 幽霊の
 消えて 行った)。
 アン ケイヌ シャーナン ヨーレエヌ イジタン(あの 木の 下に 幽霊の 出で
 た)。
 ヨーレエヤ アン ケイヌ シャーチドウ キーティ イジャ(幽霊は あの 木の
 下へぞ 消えて 行った)。

参考

アン ケイヤ ケインムンヌ ヲウン ケイドー(あの 木は ケインムンの いる
 木ぞ)。
 アン ケイナンニヤ ケインムンヌ ツィチュッドー(あの 木には ケインムンの
 憑いているぞ)。
 アン ケイヤ ケインムンヌ ツィチュッドー(あの 木は ケインムンの 憑いてい
 るぞ)。
 アン ケイヤ ケインムン__ ツィチュッドー(あの 木は ケインムン 憑いてい

るぞ)。

2-2-2-2-3 動作や状態がなりたつ状況をあらわす

2-2-2-2-3-1 動作や状態がなりたつとき

ヨージ ハーヌン フーティ イショチ イジャ (四時半に起きて漁へ行った)。

ヨージン フーティ イショチ イジャ (四時に起きて漁へ行った)。

ヨージン フーティ イショ イジャ (四時に起きて漁へ行った)。

ヨージ フー シ イショチ イジャムン ヌー クワンタ。(四時起きして漁へ行ったもの何くわなかった。何も獲れなかったの意。)

ヨージ フー シ イショ イジャムン ヌー クワンタ。(四時起きして漁へ行ったもの何くわなかった。)

×ヨージ フーティ。(四時起きて)

×ヨージン フー シ。

トゥシウチン ユムィ モラワンバ (年内に嫁貰わなければ)。

トゥシウチンティ ユムィ モラワンバ (年内にて嫁貰わなければ)。

トゥシウチナンティ スマチ ウチコ (年内にて済ませて置いておこう)。

2-2-2-2-3-2 移動の目的 (移動名詞、事件名詞)

「隣家の屋根葺きに子供を行かせる」などは直訳できない。

ヤーウブシ カセエラサンバ (屋根葺き 加勢させなくては)

ヤーウブシ カセエギヤ イキュ (屋根葺き 加勢が 行く。「屋根葺きの加勢に行く」の意)。

セーク シギヤ イキュ (細工 し が 行く。「大工をしに行く」の意)

タンガ オセエギヤ イキュ (手長海老 押さえが 行く。「手長海老を捕りに行く」の意)。

ガン トゥリギヤ イキュ (蟹 捕りが 行く。「蟹を捕りに行く」の意)。

イユ ツィリギヤ イキュ (魚 釣りが 行く。「魚を釣りに行く」の意)。

イユツィリ イジャ (魚釣り 行った)。

イユツィリチ イジャ (魚釣りへ 行った)。

×イユツィリナン イジャ (魚釣りに 行った)。

ヒンナガルイイショヌ カブシ トゥリギヤ (昼流れ漁の 餌 獲りが。「昼流れ漁の餌を獲りに」の意)。

上記は動名詞だけか？名詞は目的になるか？

×プールチ スヱエギヤ イキュ (プールへ 水泳が 行く)。

プールチ スヱエギ シギヤ イキュ (プールへ 水泳 し が 行く。「プールへ泳ぎに行く」の意)。

これはガ格へ

ジュートゥ イショ イジャ。(父と 魚釣り 行った。)

ジュートゥ イショチ イジャ。(父と 魚釣りへ 行った。)
×ジュートゥ イショナン イジャ。(父と 魚釣りに 行った。)

2-2-2-2-3-3 原因(デキゴト・現象をあらわす名詞、普通はデ格)

「区長の死におどろいた」「合格におどろいた」などの直訳はむずかしい。

「おどろく」は「～て おどろく」が普通か？

たとえば

×ヤマヌ バクハツナン ウビッツケイタ(山の 爆発に 驚いた)。

ヤマヌ バクハツシ ウビッツケイタ(山の 爆発で 驚いた)。

コーシュ ゴーカク シュンチャ オモワンタムン(甲種 合格 するとは 思わ
なかった)。

コーシュ ゴーカク シャンチ キチ ウビッツケイタ(甲種 合格 したと
聞いて 驚いた)。

ムイーン ツインキャラン シコ オープリシ オームイズイヌ イジティ コー
ワタリ マデェ シ。(目に 見えない くらい 大降りして 大水が 出て 川 渡
り できなかった)。ナガムイドウキ 長雨時 のこと。

「台風で土手がこわれて」

テーファー アムイシ ドテェヌ キョールイティ タブクロヤ ニャ ウミ ナ
ティ イネイガナシヤ ムンナ ナランタ(台風 雨で 土手の 壊れて 田袋は も
う 海 になって 稲は 物には ならなかった)。

テーファー アムイシ ドテェ キョールイティ タブクロヤ ニャ ウミ ナ
ティ イネイガナシ ムンナ ナランタ(台風 雨で 土手 壊れて 田袋は も
う 海 になって 稲 物に ならなかった)。

「洪水のために」

ハースグルイ ムイズイヌ チ(赤汚れ 水の 来た)。

語彙参考

悲しむ「クヤシャ」

昼釣り「ヒンナガルイイショ」

夜釣り「ヨナガルイ」

2-2-2-2-4 結果やようす、認識の内容をあらわす

2-2-2-2-4-1 結果

「立派な青年に成長した」は直訳しづらい。

ヱー ネエセエ ナタ(良い 青年 なった)。

イナサリン ビニャビニャドウ シュタン クワージャッカ(幼いとき びにゃびにゃ
ぞ していた 子じゃが)。

イナサリン ビニャビニャ シュタン クワージャッカ ホデェタットウ ヱー タ
ヱカク ナタ(幼いとき びにゃびにゃ していた 子じゃが、成長したら 良い
体格 なった)。

「信号が赤にかわった」

チャンガ ハムイツィケイティドゥ ㊦ー クラシ ナタッカ(父さんが 頑張っ
て ぞ 良い 暮らし になったよ)。

イル カワティナ(色 変わったか)

ツィラ カワティ(顔 変わって) ツィラガワリ シ(顔変わり して)

ヌー イリュ ナティ?(何 色 なって?)

ヌガ シンゴーヤ アカジャッカ(どうして 信号は 赤だが)。

ヌガ シンゴー アカジャッカ(どうして 信号 赤だが)。

シンゴーヤ アカ ナタッカ(信号は 赤 だったが)。

シンゴー アカ ナタッカ(信号 赤 だったが)。

シンゴーヤ アカドー(信号は 赤ぞ)。

シンゴー アカドー(信号 赤ぞ)。

「良い紬に織り上げて」の直訳はむずかしい。

ニャ キンナ ㊦ー アゲイティナ?(もう 着物は 縫いあげたか?)

ニャ キンナ ㊦ー アゲイティナ?(もう 着物は 縫いあげたか?)

ニャ キン ㊦ー アゲイティナ?(もう 着物 縫いあげたか?)

㊦ー ツムギ ナタッカ。(良い 紬 だったが)。

イッチャ ヲウティ アッカナ。(良く 織って あるがな)。

キャラサ ヲウティ アッカナ。(きれいに 織って あるがな)。

イッチャ ツムギ ウリアゲイティ アッカナ(すばらしく 紬 織り上げて あ
るがな)。

クウン タンムンシ キン ナシ。(この 反物で 着物 なせ)。

クウン タンムンシ ター タムィ キン ㊦ー。(この 反物で 誰 為
着物 縫え)。

語彙参考

「キン」は「衣」から出ているが、現在普通には「着物の意味」だけで使われている。
紬の織りはじめのころ(最初の模様が出てくるまで)を「オリヤゲイ」という(川畑さ
ん談)。

オリヤゲイタットゥ キョラサ モヨーヌ イジトウタ。(織り上げたところが 綺麗
に 模様が 出ていた)。

「織りはじめ」のことは、「オチャゲイハジムィ」という。

2-2-2-4-2 ようす

ツラヌ カタ ナラビティ アッカナ。(碁石が)顔の 形 並べてある)。

ツラヌ カタチ ナラビティヤッカナ。(碁石が)顔の 形 並べてある)。

チュンツラネイシドゥ ナラビティヤッカナ。(人の顔のように 並べてあるよ)。

チュンツラネイシドゥ シュッカナ。(人の顔のように しているよ。)
ガンナ ヨコ アッキドゥ シュッカ。(蟹は 横 歩きぞ しているよ。)

アベエ アン デンチューヤ ナナメドゥ タッチュッカ。(あれ、あの 電柱は
斜めぞ 立っているよ。)

アベエ アン デンチューヤ ナナメエ タッチュッカ。(あれ、あの 電柱は 斜
め 立っているよ。)

参考

アン デンチューヤ ナンマ タッチュドゥ。(あの 電柱は 今にも 立ちそうだ)
ニャ タッチ。(もう 立った)
デンチューヌ タッチュン。(電柱の 立っている)
デンチュー タツカヅ(電柱 立つかな)。

カビ キリユン。(紙 切る。)

インヌ カタ キリユン。(犬の 形__ 切る。)

カビバ インヌ カタ キリユン。(紙ば 犬の 形 切る。)

カビバ ハサンシ インヌ カタチ キリユン。(紙を ハサミで 犬の 形__ 切
る。)

カビシ インヌ カタチ キロエー。(紙で 犬の 形 切ろうね。)

ハサンシ カビバ インヌ カタ キリユン。(ハサミで 紙ば 犬の 形 切
る。)

ノコシ ケーバ インヌ カタ キリユン。(鋸で 木ば 犬の 形__ 切る。)

ノホギリシ ケーバ インヌ カタ キリユン。(鋸で 木ば 犬の 形__ 切
る。)

カタナン、カタン、カタチとはならない。二重直接補語。

ケーシ インヌ カタ キリユン。(木で 犬の 形 切る。)

タンムンシ キン ヌユン。(反物で 着物 縫う。)

2-2-2-2-4-3 認識の内容

ツキカゲエシ アン ケイヌ カゲエヤ ヨーレエヌ タッチュンガネイシドゥ ミリ
ヤッタ。(月影で あの 木の 影は 幽霊の 立っているようにぞ 見られた。)

ツキカゲエシ アン ケイヌ カゲエヤ ヨーレエネイシドゥ ミリヤッタ。(月影で
あの 木の 影は 幽霊のようにぞ 見られた。)

ツキカゲエシ アン ケイヌ カゲエ__ ヨーレエネイシドゥ ミリヤッタ。(月影で
あの 木の 影 幽霊のようにぞ 見られた。)

「猫の声が赤ん坊の声に聞こえる」

マヤヌ クウヅバ ハーコガヌ ナチュン クウヅチ オモティ。(猫の 声ば 赤子
の 泣いている 声と 思って。)

このバは省略しにくい。

アン マヤヌ ナキ クウヱヤ ハーコガヌ クウヱネイシ キキヤッティ。(あの猫の 鳴き 声は 赤子の 声のように 聞かれて。)

アン マヤヌ ナキ クウヱ ハーコガヌ クウヱネイシ キキヤッティ。(あの猫の 鳴き 声 赤子の 声のように 聞かれて。)

上が可能なのは提題的だからか？

マヤヌ クウヱヌ ハーコガヌ クウヱネイシ キキヤッティ。(猫の 声の 赤子の 声のように 聞かれて。)

又は提題的でないから省略不可能か？

2-2-2-2-4-4 認識の対象

「私を敵にみたててなくってごらん」

ワンバ カタキチ オモティ カハチ チンニ。(私ば 敵と 思って かかって 来て みる。)

ワン カタキチ オモヲイ。(私 敵と 思え。)は一見するだけでは、まず「私の敵と思え」という意味であり、「私を敵と思え」とはならない。

ワンバ カタキチ オモヲイ。(私ば 敵と 思え)

イヤ サキジャガ。(お前 先だが)は、「お前が先だ」の意味で、「(私が)お前の先だ」というときは(私が)が形を表わし、

ワガ イヤ サキジャガ(私が お前 先だが)となる。

イヤ サキ スイロ。(お前 先 しよう。)は「お前を先にしよう。」の意味である。

イヤ サキ スイレイ。(お前 先 せよ。)は「お前が先にせよ。」の意味である。

2-2-2-2-5 補助的な単語とくみあわせる

2-2-2-2-5-1 「なる」「する」とくみあわせる

「なる」「する」はN

「オタマジャクシが蛙になる」

ビルヤ ビツキャ (ドウ) ナリュ。(オタマジャクシは 蛙 (ぞ) なる。)

クワーヤ ウンウチ フツチュ ナリュ。(子は そのうち 老人 なる。)

×ハギバ ボー ナシ アッキユ。(足ば 棒 して 歩く。)これは標準語の直訳で、島の方は、足が棒になったらそれこそ大変だと笑う。でも以下の表現は可能である。

ハギヌ ボー ナルガディ アツチュティ トウムイタ。(足の 棒 なるまで 歩いて 探した。)

ハギヌ ボー ナルガディ アツチャムン トウムイラランタ。(足が 棒 なるまで 歩いたが 探せなかった。)

2-2-2-2-5-2 コピュラとくみあわせる

「彼は漁師にちがいない。」

アルイヤ マチゲエネン イショシャ。(あれは 間違いのない 漁師。)

アルイヤ マチゲェネン シンシェキドー。(あれは 間違いない 先生ぞ。)

古老は、「アルイヤ イショシャ マチゲェネン(あれは 漁師 間違いない)」とは使ったことがないという。

「～にちがいない」は表現しにくい。

2-2-2-2-5-3 後置詞とくみあわさる

「～について」

「商売について話す」

ショーバキヌ クトゥ ドウ ハナチャ。(商売の 事 ぞ 話した。)

ショーバキナン ツィチドウ ハナチャ。(商売に ついてぞ 話した。)

ショーバキナン ツィチドウ ハナチモチャ。(商売に ついてぞ 話していらした。)

「～によって」

「砂糖黍は直河内によってもたらされた」

ヲウギヤ スナヲカワチナン ユティ ツィクリュンガネィシ ナタ。(砂糖黍は 直河内に よって 作るようになつた。)

ヲウギヤ スナヲカワチナン ユティ ハヤタ。(砂糖黍は 直河内に よって 流行つた。)

意味は、

スナヲカワチドウ ヲウギダネィ ムッチチャン。(ムッチチャル)(直河内ぞ 砂糖黍種 持って来た。)

「シマにおいてはシマユムタを話す」

シマナンティア シマユムタ 、ヤマトウナンティア ヤマトウグチ。(シマにてはシマ言葉、ヤマトにては ヤマトグチ。)

「会合において良い発言をした」

ムラヨリエナンティ(ムラヨリエンティ) カシカシドウ キマタ。(村寄り合いにてこうこうぞ 決まった。)

アツマリナンティ キー ハツゲン シャ。(集まりにて 良い 発言 した。)

ムラヨリエンティ イユンチ イチャットウ ビーラッティ。(村寄り合いにて 言うと言ったら 吠えられた。)の意味は、集会で発言したところが大きな反対にあった。

(「ワーワーいわれた」の意味。「犬がほえる」は「インヌ ビーリュ」である。)

「工事に関して説明する」は、

コージナン ツィチ ハナシュ。(工事に ついて 話す。)

「シマ人に対する圧力があつた。」

シマンチュチ アツリョク ケータ。(シマの人へ 圧力 かけた。)

シマンチュカチ アツリョク ケータ。(シマの人へ 圧力 かけた。)

シマンチュナン アツリョク ケータ。(シマの人に 圧力 かけた。)

シマンチュン アツリョク ケータ。(シマの人に 圧力 かけた。)

シマンチュ アツリョク ケータ。(シマの人 圧力 かけた。)

も可能であろうか？

シマヌ チュン アツリョク ケータ。(シマの 人に 圧力 かけた。)

「当局に対して堂々と発言する」

トーキョクカチ モカティ フトゥグトゥ シャ。(当局へ 向かって 批判言 した。)

トーキョクチ モカティ フトゥグトゥ シャ。(当局へ 向かって 批判言 した。)

トーキョク モカティ フトゥグトゥ シャ。(当局 向かって 批判言 した。)

×トーキョクナン モカティ フトゥグトゥ シャ。(当局に 向かって 批判言 した。)

「働きに応じて分配される」

ハタラキナン ユティ ヲエヘエリュ。(働きに よって 分ける。)

参考。本動詞「～に応じる」もあまり使わない。

「知らせに応じて集合した」

ヤクバヌ シリヤセエナン ユティ アツマタ。(役場の 知らせに よって 集まった。)

「オージラン」、「オーシラン」はよく使う。

2-2-2-3 標準語の方向格に相当する N 補語と述語

方向格(チ格)

ハマチ イジ アスイポー。(浜へ 行って 遊ぼう。)

シドコロ格(ジ)

ハマ イジ アスイポ。(浜 行って 遊ぼう。)

ハマジ アスイポ。(浜で 遊ぼう。)

ハマナンティ アスイポ。(浜にて 遊ぼう。)

ハマンティ アスイポ。(浜にて 遊ぼう。)

ヤンティ アスイポ。(家にて 遊ぼう。)

ヤン ナハンティ アスイポ。(家の 中にて 遊ぼう。)

ヤン ナハンティ アスイポ。(家の 中にて 遊ぼう。)

遊ぶは近い補語を必要としない。

踊るもそうか？

「チ」と「カチ」はほとんど同じように使う。

2-2-2-3-1 移動の到達点

カゴシマチ イキュン。(鹿児島へ 行く。)

カゴシマ イキュン。(鹿児島 行く。)

トーキョーチ タンカン_ ウクリュン。(東京へ タンカン 送る。)

タンカンバ トーキョー ウクリュン。(タンカンば 東京 送る。)は可能か？

2-2-2-3-2 方向

「左へ曲がる」

カド マガリュン。(かど 曲がる。)

ヒジャリチ マガリュン。(左へ 曲がる。)

ヒジャリチ マガティ タァーツィメエヌ ヤードー。(左へ 曲がって 二つ目の家ぞ。)

ヒジャリカチ マガティ タァーツィメエヌ ヤードー。(左へ 曲がって 二つ目の家ぞ。)

ヒジャリ マガティ タァーツィメエヌ ヤードー。(左 曲がって 二つ目の家ぞ。)は可能か？

×ヒジャリナン マガティ タァーツィメエヌ ヤードー。(左に 曲がって 二つ目の家ぞ。)は可能か？

アガルヅチ モカティ アッキュ。(東へ 向かって 歩く。)

アガルヅカチ モカティ アッキユ。(東へ 向かって 歩く。)

「明き方へ向かって手をあわせる」

アキホー モカティ ティ アワシユ。(明き方 向かって 手 合わせる。)

アキホーチ モカティ ティ アワシユ。(明き方へ 向かって 手 合わせる。)

アキホーカチ モカティ ティ アワシユ。(明き方へ 向かって 手 合わせる。)

2-2-2-3-3 あらわれる場所やきえる場所

あらわれる場所

ナン+出る

ケインムンナ ガマヌ ウイーナン イジリュ。(ケンムンは 崖の 上に 出る。)

きえる場所

チ+行く

ケインムンナ ガマヌ ウイーチ キーティ イジャ。(ケンムンは 崖の 上へ 消えて 行った。)

ケインムンナ ガマヌ ウイー イジャ。(ケンムンは 崖の 上 行った。)は可能だが、

×ケインムンナ ガマヌ ウイー キーティ イジャ。(ケンムンは 崖の 上 消えて 行った。)は難しい。

2-2-2-3-4 あいて

「ご用の方は受付へ申し出てください」

ユーヅヌ アン チュヤ ウケイツィケイチ イモレ。(用事の ある 人は 受付へ いらっしゃい。)

ユーヅヌ アン チュヤ ウケイツィケイカチ イモレ。(用事の ある 人は 受付へ いらっしゃい。)

ユーヅ アン チュヤ ウケイツィケイ イモレ。(用事 ある 人は 受付 いらっしゃい。)

ユーヅヌ アン チュヤ ウケイツィケイジ ハナチモレ。(用事の ある 人は 受付で 話してらっしゃい。)

ユーヅヌ アン チュヤ ウケイツィケイトウ ハナチモレ。(用事の ある 人は 受付と 話してらっしゃい。)

2-1 主語

不活格構文の主語は基本的には無標であらわれると思われるが、最近では N 又形で表われることが多くなっている。丁寧に表現しようとするとしても仕方がないかもしれない。

しかし不活格構文が N 又主語をとると、やはり N を強調しているように感じる。

2-2 補語

不活格構文には、近い補語は基本的にはないと思われるが、すべての不活格構文で補語不在かどうかは検証してみなければならない。

2-3 主語と述語

2-3-1 身体部分主語（主語と述語が一体化する傾向がある）

ムイ サムイティ。(目 さめた)

ハギ ウゴシ(足 動いた)

イブイ マガティ(指 曲がった)

一語化「イブイマガリ チュ(指曲がり 人)」

ワタ マガトウッカ(腹 曲がっている。ひねくれている人の形容)

一語化「ワタマガリ チュ(腹曲がり 人)」

キム マガトウン チュ。(肝 曲がっている 人。性格の悪い人の形容)

一語化「キムマガリ チュ(肝曲がり 人)」

ハナ マガトウンチバ。(鼻 曲がっているのよ)

一語化「ハナマガリ チュ(鼻曲がり 人)」

フツカヨキシ カマチ ヤディ オーシラン。

(二日酔いで 頭 痛くて どうしようもない) 一語化「カマチヤミ(頭痛)」

キニュヌ トウレシ ツィラ ハルイティ。(昨日の ケンカで 面 腫れた)

ミン キキュン チュドー(耳 聞く 人だよ。耳の良い人のこと。)

2-3-2 自然現象（主語と述語が一体化する傾向がある）

カゼ フキュリヤー。(風 吹くねー)

一語化 カゼフキジャヤー(風吹きだね。風吹くねー)

アムィ フリュリヤー。(雨 降るねー)

一語化 アムィフリジャヤー(雨降りだね。雨降るねー)

ナミ タッチュリヤー。(波 たっているねー)

一語化 ナミダチジャヤー(波立ちだねー。波たっているねー)

シュ ミッチ チャ(潮 満ちて きた)

ナマ シュ ヒチュッカ(今 潮 干いているよ)

ムジ ハトゥリヤー。(水 流れているねー)

アマヤ ムジ イジリユンドロドー。(むこうは 水 出るところだよ)

2-3-3 できる物・つくるもの

ムン タケティナー。(ご飯 炊けたかなー)
オバン タケタットー。(ご飯 炊けたよー)
ミンギョ デケタットー(人形 できたよ)
サタ デケタッカーナー(砂糖 できたねー。ちゃんとできたときの祝福の言葉)
ユ ワシナ。(湯 沸いたか)
ホロ ワサットー。(湯 沸いたよ)

2-3-3 社会現象

バチ アタリユットー。(罰 あたるよ)。
ムジ ハトウッカ、トウムイルイ。(水 流れている、止めろ)。
ムジ イジトウカ、トウムイルイ。(水 出ているよ、止めよ)。
テーフーシ フネィ イジランタ。(台風で 船 出なかった)
ハチグウツィラウドゥリ ハジマタットー。(八月踊り 始まったよ)

2-3-4 状態動詞(旧形容詞)

キン フサティドゥ ナキュル。(着物 欲しくて 泣いている) 活格構文 主語の省略。

キン フサ(着物 欲しい)

一語化 キンフサ シンナヨ(着物欲しさ するなよ。着物を欲しがるなの意)

シマ ナツィカサ(島 懐かしい。)一語化 シマナツカサ(島なつかしい)

アンマ ナツィカサヌ ユルユル ナスタン(母 恋しくて 夜々 泣いていた)

アン クウクマ クン クウ カナシャ(あの 娘より この 娘 かわいい)

キム ターサン ツドー(肝 高い 人だよ。気位の高い人だよの意)

アン チュ キム フテサットー(あの 人 肝 太いよー。太っ腹の人のこと)

カミ ナガサン ツドー(髪 長い 人だよ)

セ ターサヤー(背 高いね)

クン ヤマンクマ アン ヤマ ターサヤー(この 山より あの 山 高いね)

ヤマトソイヤ ヤマ フカサン シマドー(大和村は ヤマ 深い 村だよ)

ウミ フカサットー(海 深いよ)

キューヤ ナミ ターサットー(今日は 波 高いぞー)

キューヤ カゼ ツッサリヤー(今日は 風 強いねー)

オーサカクマ キョウト アチサッカ(大阪より 京都 暑いよ)

ヲウナグ キョラサンドロヤ アッキュー(女 美しいところは 芦花部)

アショヤ ハマ キョラサットー(芦徳は 浜 美しいよ)

ハギ キョラサン ヲウナグ(足 美しい 女)

ヘヤ クラサリバ デント ツケィランバ

(部屋 暗かったら 電燈 点けなければ)

クウシ カタサヌ カマラン(菓子 かたくて 食べられない)

ムィ チッキヤサットー(目 近いよ)

ティ ハヤサン チュジャヤー(手 早い 人だなー。テバヤサ 一語化)

